



中庭のテラスで



旧駿河台校舎（昭和22年～31年）



卒業制作校内ショーを終えて ベランダにならんで記念撮影



旧市ヶ谷校舎（昭和31年～47年）



現校舎

千あやめ

題字 原あやめ



原あやめ先生

追悼 原あやめ先生ご逝去

山脇美術専門学校理事長
千草会名誉会長

原あやめ先生は、去る平成20年8月14日、天寿を全うされました。享年97才

学院の創立者山脇敏子先生が駿河台に開校された山脇服飾美術学院（昭和22年）を当初より、御母上である山脇先生に副院長としてお力を添えられました。また、学院長としても長きにわたり、良き一時代を築かれました。多才ですばらしいセンスの持ち主でいらした原あやめ先生は、最後までお花や絵に親しまれ、心おだやかに天国へ旅立たれました。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

千草会会長
学院長 細田直孝

謹んで原あやめ先生のご逝去を悼み、お別れの言葉を述べさせていただきます。

先生に初めてお会いした時から今日まで、思えば五十年を越える長い歳月が流れました。その間のさまざまな思い出が、今一瞬のうちに脳裏に甦り、疼くような思いが胸にこみ上げてくるのを抑えることができません。

市ヶ谷に建てられたばかりのピロティ様式の校舎から、先生の運転されるニッサンプリンスで軽井沢の山脇別荘まで連れて行っていたこと、また私の留学中にパリにいられた先生を、今度は私のルノーの中古車で、サンクルーの丘に住む知り合いの日本人画家のお宅までご案内したこと、或いは私の授業中に、机に片腕を伸ばして半ば眠ったような恰好をした学生がおりましたが、廊下を通りかかった先生は、それを見とがめると、つかつかと教室に入って来られて、その学生の姿勢を厳しく注意されたこと、また三年前の山脇展に車椅子でお見えになった時、先生は微笑を浮かべながら、しばらく中庭の光景に見入っておられた様子などが鮮明に思い出されます。

先生は車椅子に座っておられる時も、またしばらく前から歩行に杖を必要としておりましたが、その時でも、いつも背筋を真っ直ぐに伸ばしておられたのが印象的でした。それは先生の内面の張りつめた気持ちの表れだったのでしよう。親しく接していても、先生の

今年、創立80周年を迎える山脇美術専門学校は、創立者である山脇敏子先生と原あやめ先生のお二人によって、すばらしい歴史ある学院となりました。

11月1日に記念行事を行なう予定で、現在様々な計画をしております。当日はなつかしい先生方にもできるだけ多くご出席いただけるようお声をかけて行くつもりです。

卒業生の皆様と共に、山脇先生、原先生方お二人の功績をしのび、思い出のひとときを過ごすことができれば...と思っております。

次回8月発送の会報にて、くわしいお知らせをいたします。どうぞよろしくお願いたします。

くれぐれもお身体を大切にお過ごし下さいませ。

千草会

●学院へのアクセス JR総武線
地下鉄 東京メトロ（有楽町線・南北線）
都営地下鉄（新宿線）
各線 市ヶ谷駅 下車
地下から学院へは「A2」出口が便利です。

発行 山脇美術専門学校同窓会
〒102・0074
東京都千代田区九段南4・8・21
電話 03・3264・4020

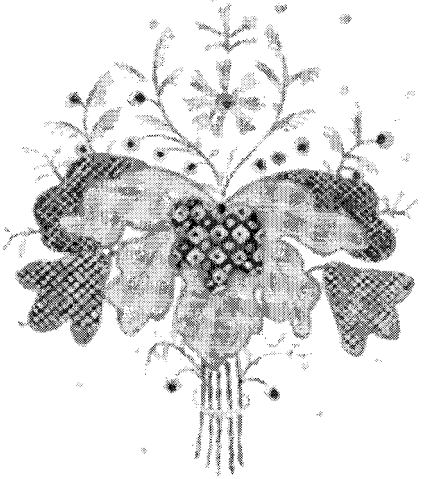


まわりには常に緊張した空気が流れているのが感じられました。

大正、昭和、平成と三つの時代を生きて来られた先生は、とりわけ戦時中、若くして夫君を病気で亡くされたことや、敗戦後は自活の道を求めて、子供を抱えながらアメリカ駐留軍の家庭で、ハウスキーパーとして働いた経験などから、その後の現代女性としての自立した厳しい生き方を身につけられたのだと思います。やがて、院長に就任されてからも、ほとんど心の休まる暇はなかったのだと思われまます。はじめは「服飾総合教育」の理念を掲げて、斬新な洋裁学院としての特徴を打ち出しながら、新校舎完成後は社会のニーズの変化に応じて、学院の目標をデザイン系の人材育成の方向にシフトさせて行きました。その間先生は一貫して、生活文化の向上を基本理念として、本学院の教育に力を尽くされてまいりました。それは、先生の平易な表現を用いれば、「毎日の暮らしが少しでも向上するように励む」ことであり、言葉を変えて言えば、生活に結びついた人間の感性と技術の融合を目指す若い人材を、社会に送り出すことだったと言ってしまうでしょう。

先日の山脇展でも、先生がご覧になれば、我が意を得たと思われるような優れた作品がいくつも発表されておりました。これからも学院スタッフ一同は、先生の遺志を継ぐべく一丸となつて努力を重ねることを心に誓いながら、先生のご冥福をお祈りいたします。

原先生、どうか安らかにお休み下さい。



お別れの言葉

清水清子

晩年の山脇先生膝下に三年程ご一緒させて頂いた折にお聞きしたお話の一つです。お母様の山脇先生は、お料理がお得意でお膳はいろ取りどりに作られた様です。

「さあ、お食事ですよ」のお声、お縁側でお人形遊びのお二人は廊下を転げんばかりに走ってお茶の間へいらっしやる、先生は小さい頃のお二人を思い出されて、お顔がほころびました。

7才のあやめさんはすでに字もお読みになって、お気に入りのお話は讀み、赤頭巾ちゃんをお聞かせになるのがお得意の様です。

「お前も食べてしまうぞ!!」
鎌のような爪、モジャモジャな毛だらけの手をニューと伸ばして赤頭巾ちゃんを掴も

うとします。3才の妹のふようさんは、だんだんと怖くなるこのお話に耳をふさぎました。

「お前も食べてしまうぞ!!」といきなり、あやめさんが近寄ります。さあ大変ふようさんはお母様にしがみつかれたとか。

またある時お食事のあと、お二人の様子に「あらあらお食事の後すぐに横になっては牛になって角が出ますよ!!」のご注意に、あやめさんはびっくりされてとび起きると、続いて起きようとするとふようさんを押しされました。角が出るのを心配しながらも、怖いけれどふようさんで試したかったのでしょうか？真剣な様子でジッと頭を見つめたり、幾度もさわりながら暫くして、「お母様、ふようさんの頭から角は出ません」と訝しいお顔をされたとか、山脇先生からお聞きしたお話です。

山脇先生は磊落な性格で、教えて頂いた事は数え切れませんし、今も私の道標です。

昭和35年の秋に山脇先生は逝去され、原先生が引き継がれて学院は隆盛になります。然し数年の後、社会は刻々と変わってゆりの時代に、この傾向を読まれる原先生は直ぐ様、実情に適した、「感性の豊かな生活の知恵」を目標とする「リビングアート科」を新設されます。学科はニーズの中にし、カリキュラムは「衣食住」の一般の知識のみではなく、教養科目にも芸術性が加えられました。

更に十数年経て次々と時勢は急速に移り変わって、ご自身の教育の理念を曲げる事な

「やっとなてくれたのネ。学院御苦労さんだったわね」とか、あやめの言葉から会話が始まったのではないのでしょうか。

先生自伝の中の「少しでも暮らしが向上する様に励む気持ちを持つように」のお言葉を守り、私達山脇に関わった者達が山脇の発展を願い、頑張りますので泉下において御力をお与え下さい。

そして限らない先生のご冥福を御祈りしてお別れの言葉と致します。

旧職員 洋裁科主任

あやめ先生さようなら。

前田美菜子

原あやめ先生との永遠のお別れは哀しくここに慎んでご冥福をお祈り申し上げます。

私が山脇に在籍致しましたのは旧洋裁本科。一クラス五十人の賑やかさで、授業は厳しくも楽しい日々でした。あやめ先生からは様々なご指導を戴きましたが、一番の思い出はシルクのコート制作。四メートルに及ぶ緑色のトリミングは苦心の末の完成間近のことでした。

「よく頑張ったけれどこれを着て自然に振舞えると思える？」先生のご指摘に一瞬目の前は真っ白。思い返せば大好きな緑色を選んでしまっただけ、グラビア写真のような服に憧れただけでした。

「服は着る人と一体になって初めて美しい

く持続させるための運営方針の一大改革として、学校法人に付帯事業を組み込まれました。

原先生は就任されて、止むことのない社会情勢が移る毎に、適切な対処の実践をなされ、この構想は原先生の最後のお仕事で、またしても大きなご苦心の始まりになりました。

昨年夏、避ける事はできない原先生とのお別れとなり、先生のご偉業が刻々鮮明に大きく膨らみます。

思い出は美しいと申しますが、そうとも限りません。それは先生は途切れることのない河の流れの様に苦勞が多かったためと思います。山脇先生のご意志を継がれ今を築かれたあやめ先生のご苦心を、言葉では到底言い尽くせません。一時たりと学院から解き放たれる事がないそのご心労を私はどれほど理解出来たでしょうか？

容姿の華奢な先生のどこからあのエネルギーが生まれるのでしょうか。それは先生の信念からです。院長として、多くの職員、学生を導かれました。その教えは限りなく、幾度も思い重なります。

先生はよくこうおっしゃいました。『己を知りなさい』と。
先生の随筆「忘れられぬことども」を拝読致しますと、お声が聞こえます。私の残り少ない日々、数々の教えを反芻して、過ごしたいと思っております。

先生、有り難うございました。

旧職員 リビングアート科主任

もの。どうすれば良いか考えなさい。「解いて、色を選び直し、何倍もの時間を費やしながら「デザインをする意味」を知りました。あやめ先生は沢山のクラスをまるで風のように軽やかに回って歩かれるのですが、今でも美しいコッコツというヒールの音と、香りが思い出されます。未熟な十代の私達にとって「香りを纏う」という事は大人の女性になる為の挑戦でもありました。何と言う香水ですか？・・・という問い掛けに、先生は「フツツ」とだけ微笑まれて、教えては下さらず、

「自分の香りを持つ事の大切さ」を課題になさったままでした。

三年目のコスチューム科になると、授業内容と直結するご指導もさることながら、一人として自立やビジョンに関わるお話しが混じるように感じられました。「あなた達に、想いのまま十分に何かを伝える為に学院はある。その学院を支えるにはスポンサー事業も大切なよ。」どちらかと言えば、女性としては低い声で淡々と語られる内容に、強い衝撃を感じたものでした。先生は「大切なものを守る為には強い意志と自立の力が必要」な事を教えて下さったのです。

学院を卒業して数十年。多くの人と交わり、社会に出てデザインに関わる仕事を果たし、「美しいものを求める姿勢・女性としての身嗜みと本物の強さ」をお教え頂いた事の重さを噛み締めるばかりです。

旧講師 ファッション画担当

佐藤京子

謹んで原あやめ先生の御霊に献げます。あやめ先生、お別れの時がとうとう来てしまいました。

山脇先生亡き後、四十八年、二代目として学院発展の為、瘦身に鞭打って頑張っていらした姿に心打たれておりました。

先生自伝の「忘れられぬことども」のあとがきに「神が人にお与えになる試練」と書いていらっしやいます。御自身のおかれた立場を自覚なさって前に進んでいらっしやったのだと思います。

駿河台時代の先生は知的で一才冷たくて近寄り難かった感でしたが二十年位前から随分と柔らかくなられ私達も安心しておしゃべり出来る様になりました。敏子先生の思い出話をしておりますと御機嫌が悪くなられました。先生もジェラシーを感じられたのでしようか、可愛らしい一面も持っていらっしやいました。

時折御便り頂戴致しました最後は九十一才の十月二日付けでした。美しい文字で素敵な文章で葉書の中にバランス良く収まっているのです。文字そして配分、先生の人となりがやはり尊敬出来る一本筋の通っている方だったと心から思っております。

九月二十八日、納骨式で小平霊園に詣でました。山脇先生にもお逢い致しました。津田青楓先生の筆による山脇敏子の墓の大きな墓石の下へ敏子先生のお隣に寄り添って入られました。胸が痛くなりました。



原あやめ先生 自伝「忘れられぬこども」出版 1999年



「山脇敏子回顧展」山脇ギャラリーにて 2002年



皆様と談笑される原あやめ先生 パーティーにて



山脇ギャラリーオープニングパーティー 1999年



原あやめ先生 絵画展 2000年



原あやめ先生 絵画 2000年



展示会場となったパリ市モンソー公園前の
チェルヌスキー美術館



「日本の服飾と美術」展のポスター
(1957年2月15日~3月31日)



原あやめ先生 デザイン画



原あやめ先生 デザイン作品 1966年
卒業制作ショーに賛助出品



服飾界に貢献した功績により
山脇敏子先生がパリ市長から
授与されたゴールドメダル



パリの展示会での山脇敏子先生と
原あやめ先生



雑誌「婦人友」1978年7月号誌上で自作の服を着た原あやめ先生



雑誌「服飾美術」1958年7月創刊号



雑誌「私のデザイン」1954年4月創刊号

原あやめ先生年譜

西暦	邦暦	歳	世界・日本の動き
1911	明治44	2	京都府宇治市にて、父津田青楓(本名亀治郎)、母敏子(旧姓山脇)の長女として生まれる。
1913	大正2	2	東京府東京市小石川区高田老松町に移転。
1914	大正3	3	弟安丸誕生。名付け親は当時父と親交のあった夏目漱石先生。
1915	大正4	4	父・津田青楓が発起人として参加する第一回二科美術展開催。
1916	大正5	5	妹ふよう誕生。
1917	大正6	6	小石川区関口台町34に移転。
1918	大正7	7	弟安丸疫痢にて病没。
1919	大正8	8	この頃、豊明幼稚園の先生のすすめで、ピアノを習い始める。
1920	大正9	9	夏目漱石先生永眠。
1921	大正10	10	日本女子大付属豊明小学校に入学。
1922	大正11	11	弟・庸病没。
1923	大正12	12	妹・ひかる誕生。
1924	大正13	13	母・敏子洋裁研究のため渡仏。
1925	大正14	14	寺田虎彦氏、父、妹ふようと第十回二科展会場の上野美術館にて関東大震災に遭う。
1926	大正15	15	父と母が離婚。
1927	大正16	16	父・敏子の帰国を、父、妹とともに神戸に出迎える。
1928	大正17	17	父と共に京都市東山区に移転。
1929	大正18	18	同志社女学部三年に転入。
1930	昭和3	19	単身上京、母と同居。
1931	昭和4	20	母・敏子現在の山脇美術専門学校の母体となる山脇洋裁学院を東京銀座に開校。
1932	昭和5	21	妹ひかる肺結核にて病没。
1933	昭和6	22	ピアノの恩師ロランジュ先生とシベリア鉄道でデนมマークへ留学。
1934	昭和7	23	父・起訴保留にて釈放。
1935	昭和8	24	父・津田青楓二科展出品制作中に検査さる。
1936	昭和9	25	父・起訴保留にて釈放。
1937	昭和10	26	父の友人生田夫妻の媒酌にて、原恩雄と結婚。
1938	昭和11	27	現東京都杉並区阿佐ヶ谷北三丁目に義母と同居。
1939	昭和12	28	叔父西川一草亭死去。
1940	昭和13	29	長女・曉子出産。大久保に転居。
1941	昭和14	30	この頃からバイオリン、声楽家の伴奏をするようになる。
1942	昭和15	31	夫・原恩雄肺結核にて病没。
1943	昭和16	32	長女・曉子と父親の疎開先茨城県つくばに疎開。
1944	昭和17	33	終戦。
1945	昭和18	34	この頃から英会話を活かして、米軍将校、民間人の家庭に住み込みのハウスマイドとして働く。
1946	昭和19	35	母・敏子の仕事を手伝うべく、神田駿河台に山脇服飾美術学院開校。副院長に就任。
1947	昭和20	36	山脇服飾美術学院、財団法人から学校法人に組織変更。
1948	昭和21	37	服飾研究のため単身渡仏。
1949	昭和22	38	フランスより帰国。
1950	昭和23	39	東洋紡婦人服部の洋裁店レスポワールにデザイナーとして就職。
1951	昭和24	40	「私のデザイン」創刊。
1952	昭和25	41	千代田区九段(現在地)に「ロティ様式の新校舎完成。
1953	昭和26	42	母・山脇敏子、パリで「日本の服飾と美術」と題した個展を開催。
1954	昭和27	43	服飾界に貢献した功績によりパリ市よりゴールドメダルを受ける。
1955	昭和28	44	母・山脇敏子服飾生活四十五周年記念祝賀会開催。
1956	昭和29	45	服飾専門誌「服飾美術」創刊。
1957	昭和30	46	母・山脇敏子死去。その遺志を継ぎ新理事長・学院長に就任。
1958	昭和31	47	現在の新校舎完成。校名も「山脇美術学院」と改める。
1959	昭和32	48	学校教育法改正により学校法人専門学校「山脇美術専門学院」となる。
1960	昭和33	49	父・津田青楓死去。
1961	昭和34	50	創立五十周年記念式典挙行。
1962	昭和35	51	山脇山荘、夢科に完成。
1963	昭和36	52	創立六十周年記念式典挙行。
1964	昭和37	53	ジュウリーアート科を新設。
1965	昭和38	54	校舎南側に四階建て新校舎増設。
1966	昭和39	55	妹・ふよう死去。
1967	昭和40	56	男女共学となる。
1968	昭和41	57	スーパードレス科を新設。
1969	昭和42	58	全科コンピュータ授業を導入に伴い、ビジュアルデザイン、デジタルデザイン、インテリアデザイン、ジュウリーアートの4科体制に改編。
1970	昭和43	59	山脇ギャラリーオープン。
1971	昭和44	60	自伝「忘れられぬこども」出版。
1972	昭和45	61	「原あやめ絵画展」を開催。
1973	昭和46	62	「山脇敏子回顧展」を開催。昭和32年パリでの個展で発表した着物、ドレスの作品も展示。
1974	昭和47	63	学科組織4科を3科体制に改編。
1975	昭和48	64	(VD科、ID科、JD科)
1976	昭和49	65	8月14日逝去。
1977	昭和50	66	アメリカ同時多発テロ事件。
1978	昭和51	67	阪神大震災。
1979	昭和52	68	長野オリンピック開催。
1980	昭和53	69	昭和天皇崩御。
1981	昭和54	70	関西新空港開港。
1982	昭和55	71	昭和天皇崩御。
1983	昭和56	72	第一次世界大戦始まる。
1984	昭和57	73	第二次世界大戦始まる。
1985	昭和58	74	太平洋戦争始まる。
1986	昭和59	75	第二次世界大戦始まる。
1987	昭和60	76	第二次世界大戦始まる。
1988	昭和61	77	第二次世界大戦始まる。
1989	昭和62	78	第二次世界大戦始まる。
1990	昭和63	79	第二次世界大戦始まる。
1991	昭和64	80	第二次世界大戦始まる。
1992	昭和65	81	第二次世界大戦始まる。
1993	昭和66	82	第二次世界大戦始まる。
1994	昭和67	83	第二次世界大戦始まる。
1995	昭和68	84	第二次世界大戦始まる。
1996	昭和69	85	第二次世界大戦始まる。
1997	昭和70	86	第二次世界大戦始まる。
1998	昭和71	87	第二次世界大戦始まる。
1999	昭和72	88	第二次世界大戦始まる。
2000	平成12	89	第二次世界大戦始まる。
2001	平成13	90	第二次世界大戦始まる。
2002	平成14	91	第二次世界大戦始まる。
2003	平成15	92	第二次世界大戦始まる。
2004	平成16	93	第二次世界大戦始まる。
2005	平成17	94	第二次世界大戦始まる。
2006	平成18	95	第二次世界大戦始まる。
2007	平成19	96	第二次世界大戦始まる。
2008	平成20	97	第二次世界大戦始まる。
2009	平成21	98	第二次世界大戦始まる。
2010	平成22	99	第二次世界大戦始まる。
2011	平成23	100	第二次世界大戦始まる。